

山村暮鳥

田中清光

山村暮鳥

田中清光

筑摩書房

田中清光（たなか・せいこう）

昭和6年長野県に生れる。詩人。詩集『黒の詩集』
『田中清光詩集』『花の錬金術』ほか。評論『立原道
造の生涯と作品』『詩人八木重吉』『堀辰雄一魂の旅』
『世紀末のオルフェたち』『山と詩人』のほか随筆集
『山上の堅琴』がある。筑摩書房版『八木重吉全集』
（全3巻）の編纂に従い、編著に『八木重吉文学アル
バム』がある。

山村暮鳥

1988年4月22日

■著 者 田中清光

■発行者 関根栄郷

■発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8 郵便番号101—91

振替 東京6—4123

Tel. 291—7651(営業) 294—6711(編集)

■整 版 井村印刷

■印 刷 多田印刷

■製 本 矢嶋製本

© Seikō Tanaka 1988 Printed in Japan

乱丁・落丁本は御面倒ですが小社読者係宛御送付下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-480-82241-0 C0095

はじめに

『聖三稜玻璃』という詩集をはじめて読んだのは、もう二十数年も前になるだろうか。それ以来いずれじつくりと読んでみたいと思っていたが、数年前から周辺資料を含めて読み返しをはじめた。近代の詩のなかで、たいへん気になる詩集の一つだったからである。

山村暮鳥が、暮鳥らしい詩を書いた時期は、ほぼびつたりと大正期に重なっている。大正という時代は十五年にもみたくない短さで、過渡期などとはよく人もあるが、不思議な芸術上の果実が生まれたときでもある。絵画でいえば村山槐多や関根正二がすぐに想起されるし、詩の方ではこの『聖三稜玻璃』などがさしすめその一つといえる。

不思議といったのは、これらがともに個性的先駆的な要素をもちその後二度とこのような仕事が出てこないのと同時に、それらは孤立していて前後の脈絡から切れたところがあるように見えることである。しかもいずれも未成熟の面を残し、それでいて大きな可能性を暗示しつつつづけるところをもっている。

大逆事件、「白樺」「青鞥」の発刊、明治天皇逝去等々の幕明けをもつ時代を出発点にしたかれら

の仕事には、明らかに新しく開かれてゆく開口部があらわとなり、一方つねに現実との落差からくる挫折がそれと相接していた。『聖三稜玻璃』はまさしくそのような運命をもった詩集なのであるが、このあまりに早く出現した詩の光源をさぐることによって何が見えてくるのか。『聖三稜玻璃』の刊行は大正四年（一九一五年）のことである。

じつは一九一〇年代（明治四十三年～大正八年）というとらえ方をしてみると、この時期には、わが近代芸術の方向を決するような事柄が次々に起きている。詩では口語詩の出發がこの時代で、過去の文脈との断絶、個性解放、社会的要素の拡大、とさまざまな要素が登場してくるなかから、高村光太郎の『道程』、萩原朔太郎の『月に吠える』が近代詩の出發点を形づくった。短歌では斎藤茂吉の『赤光』、俳句では飯田蛇笏などの作品、小説では武者小路実篤、志賀直哉、谷崎潤一郎、芥川龍之介、佐藤春夫らの仕事がある。演劇でも島村抱月、松井須磨子の芸術座旗揚げ、音楽ではドイツ留学から帰国した山田耕筰のわが国初の交響楽団運動があり、美術の方では文展対二科展、院展という、官展と在野団体の分立、印象派、後期印象派の移入等がそれに当たるだろう。こうしてみるとこの時代は、まさに今日の出発点でもあったのである。（一九一〇年代の詩集をもう少しあげてみると、北原白秋『思ひ出』『東京景物詩及其他』『真珠抄』『白金之独楽』、木下幸太郎『食後の唄』、永井荷風『珊瑚集』、三木露風『白き手の獵人』、福士幸次郎『太陽の子』、室生犀星『抒情小曲集』『愛の詩集』、日夏耿之介『転身の頌』、千家元麿『自分は見た』等がある。）

詩においてはこの時期をとおして、口語体の詩を詩表現として自立させるための試みが重ねられていたわけであるが、なにしろ文語詩を屠（ころ）るのと同時に形式と内実の達成までを棄て去ってしまった

て出発したわが国の口語詩であつたから、さまざまな試行錯誤がくりかえされた。

そうした創成期にあつて、きわだつて尖鋭な詩表現をみせたのが『聖三稜玻璃』の暮鳥である。暮鳥が『聖三稜玻璃』に着手したとき、わが国の新聞記事の多くがまだ文語体で書かれていたという時代だったことを思いあわせてみると、その突出ぶりが理解しやすいかもしれない。

この詩集が出現当時、否定的な扱いを受けたのはなぜだったのか。早すぎた出現と暮鳥自身も称したそれを取り巻く当時の事象を見てゆくと、仄暗い断層写真を見るようなところがあつて、そこには近代詩の特有の内質が浮かぶとともに、わが近代の不思議な跛行性もあぶり出されてくるのである。

そうしたなかで暮鳥が敢えて表出しようとしたものは何であつたのか。彼がその詩で近代そのものを問い糾ただそうとしたことも含めて、そこにはいま見ても興味深いさまざまな要素が読みとれる。完全な全集のない暮鳥の場合、当時の文章をすぐに読める状態にはないし、しかも書簡、日記の類もこの時期のものは僅かしか残されていない。彼がこの時期何を考え、時代にどのような影響され、彼の内面はどう推移したのか、を私なりに再現してみるのに意外に手間どってしまったが、そこからはなかなか刺激的な問題が現われてきた。

本書の中心は当時の彼のテキストを読み返すことに中心をおいた『聖三稜玻璃』を「読む」である。別に暮鳥の生涯の通観のために冒頭に小評伝を入れた。「人魚詩社の活動」はその両方に對する注のようなものである。

一九一〇年代に詩の前衛として登場した暮鳥。そこで挫折を余儀なくされ、やがて地方に根を下

ろす活動もしてゆく一人の詩人――。この詩人が当時孕んでいた可能性と知られていなかった問題性だが、拙ない本書によって、いささかなりと明らかにできればさいわいと考えている。

山村暮鳥
目次

はじめに

i

小評伝 山村暮鳥の生涯

1	幼少期	5
2	神学校時代	13
3	詩人伝道師の出発	21
4	尖端の詩人として	32
5	前衛の挫折	42
6	盟友との別れ	51
7	地方に根を下ろす	60
8	教会から離れて	69
9	病床での苦闘	76

『聖三稜玻璃』をへ読む

1	問題をはらんだままの詩集	101
2	時代の展望	110
3	詩集『三人の処女』	121
4	激しい跳躍	129
5	コペルニクスの転回	147
6	表現革命の起点	154
7	新詩法成立の内因	164
8	織り糸のかずかず	170
9	聖ぶらずみすと	181
10	古代インド、ギリシアの「光」	194

人魚詩社の活動

11	イマジズムの詩	200
12	詩集の構成について	207
13	暮鳥の考え	215
14	模索と混乱	229
15	当時の世評	236
16	暮鳥を挫折させたもの	246
17	『聖三稜玻璃』の意味するもの	259
1	結社の前後	275
2	人魚詩社宣言(一)	283
3	人魚詩社宣言(二)	297
4	三人の交感	302

5 「卓上噴水」創刊 315

6 外部からの酷評 324

7 『聖三稜玻璃』刊行まで

334

8 結末 340

年譜 343

あとがき 356

山
村
暮
鳥

小評伝

山村暮鳥の生涯

1 幼少期

山村暮鳥は明治十七年（一八八四年）一月十日に群馬県の農家の長男として生まれている。本名は志村八九十^{はつくじゅう}。生家の志村家は西群馬郡棟高村四十六番地（現在は群馬郡群馬町大字棟高二一八六）にあった。棟高村は群馬県の中央やや南寄りの、利根川の西、前橋市の西方、高崎市の北方、それぞれ市街から数キロのところに位置している。（棟高村は明治二十二年四月に三ツ寺村、中泉村、福島村、菅谷村と合併して堤ヶ岡村となり、昭和三十年四月には金古町、国府村と合併して群馬町となった。）

そこに立てば北から西へ、赤城山、榛名山、妙義山らの山なみが遠望できるが、この地方は冬季にはわが国有数の乾燥地といわれ、冬から春先にかけて風速十メートルをこす北風が野を吹き荒れる。いうところの上州のからっ風の、中心地である。寒気も関東の平地ではもっともきびしい。そして夏は暑く、雷の発生の多いことでも有名なところである。

こうした苛烈な気候風土に住む人々の気質は、よく上州人氣質として「義理人情にあつい、気性が荒い」と語られたり、「新しいものにはすぐ飛びつくが、飽きっぽい」、「反骨精神」をもつ、という面があるとされる（祖父江孝男『県民性¹』。また地元の萩原進氏の『上州―風土と人²―』のように、